

(公社) 日本放射線技術学会 第 65 回近畿支部学術大会

シンポジウム I :

『探求の道 Lead Clearly ～モダリティスペシャリストからの提言～』

「官能検査. CR そして FPD との出会い！」

りんくう総合医療センター 中前 光弘

1987 年, 養成校を卒業し診療放射線技師として, 奈良県立医科大学附属病院に就職した。翌年の JRC にて発表の機会を頂いたことから, 研究への果てしない探求の道が始まった。

まず, 官能検査という画質評価法との出会いは, インパクトがあった。視覚評価と言えば Receiver Operating Characteristic (ROC) が主流となりつつある時代に, サーストンの一対比較法やシェッフエの一対比較法, そして正規化順位法などの手法を広く紹介することとなった。当時は, あまり関心を示されなかった印象がある。

また, 1983 年に Computed Radiography (CR) が発表されてから単純 X 線撮影のデジタル化が始まり, 大学病院でも CR は一部の症例にのみ用いられる程度で, 全面デジタル化を考えることは無かった。公立病院で CR による全面デジタル化の取り組みが進められ, 興味深くその取り組みを注視した記憶がある。

2000 年には, CR に替わり Flat Panel Detector (FPD) が登場した。蛍光体 GOS を用いたシステムで全面デジタル化を進めた大学病院に続き, CsI を用いた FPD システムでのデジタル化に携わった。

デジタル化がもたらした恩恵は少なくないが, 被ばく線量の増加という新たな問題も発生している。これは, 診療放射線技師の大半が患者被ばく線量と撮影条件に関する意識が気薄になっている, などが原因として考えられる。

2008 年に新たに提案された線量指標 (Exposure Index: EI) の考え方に基づいた被ばく線量の最適化を目指し, 数々の取り組みも行なったが, まだまだ探求の道に終わりはない。